

氏名（本籍）	きし かおる 岸 かおる（広島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 114 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	現代女性アーティストによる母の表象
論文審査委員	主 査 教授 鰐 澤 達 夫 副 査 准教授 加 治 屋 健 司 副 査 教授 関 村 誠

## 論文内容の要旨

本論文では、現代女性アーティストによる母の表象を論じる。

私たちがよく目にする母の表象といえば、聖母子像のような我が子を慈しむ像が一般的である。しかし20世紀後半からそれとは異なった表現を目にするようになった。これらの新しい表現には多様性があり、従来の表現とは大きな隔たりが認められる。これら新しい表現が生まれた理由と、表現の内容と意味を詳細に調査し、論じていく。

本論の目的は、母の表象の歴史を調査し、慈愛に満ちた母子像の発生した文脈を探ると同時に、20世紀後半から新しい表現が出現してきた経緯を明らかにし、現代の女性アーティストたちがつくる母の表象を考察することである。際立った母の表現をしている女性作家を選び、その活動や作品を検討することで、現代における母の表象の問題を考察する。母性の表現がどのように扱われてきたか、女性から見た母や母性がいかに表現されているかを論じていく。

女性作家として、欧米からはルイーズ・ブルジョワとメアリー・ケリーの2名、アジアからはユン・ソクナムと出光真子の2名を取り上げた。

第1章では母の表象の変遷を述べ、古代の妊婦の像から現代の母の表現が生まれる経緯を示し、新しい表現が現れた理由を考察する。第2章ではフランス出身のアメリカで活躍したルイーズ・ブルジョワを、第3章ではコンセプチュアル・アーティストのメアリー・ケリーを、第4章では韓国人アーティスト、ユン・ソクナムを、第5章では、映像作家、出光真子を論じる。

第1章の1節では、旧石器時代に妊娠出産の安全を願う小さな妊婦像として現れた母像は、実を結ぶことから大地と豊饒に関連づけられ、大地母神として発展していき、エジプト、ギリシア、ローマを経て、中世ヨーロッパのキリスト教の聖母子像と、連綿と継承されたことを述べた。それら母子像は、各時代の要求に合わせ、さまざまなイデオロ

ギーによる言説が付与されていた。第2節では、社会が近代化しブルジョワジーが台頭する中、女性たちは男性中心の社会に帰属し、その要求に従い「良き母」を表現したことを述べた。第3節では、第二次世界大戦後に女性の復権を唱えるフェミニズム運動がおこり、それに従い女性による新しい表現が生まれたことを述べた。

第2章のブルジョワは、母に対するコンプレックスや、父母の不仲の中で感じていた抑圧を蜘蛛で表わし、深層心理を表現した。また、自身の妊娠出産の経験から生じた不安、子育て中の悩みを発展させ表現し、自己流の分析を試みた。

第3章のケリーは母性の懐疑から、自身の出産育児の記録を媒体に、テキストとモノに心理学を加え母親の行為を分析し、鑑賞者に呈示し考察を促した。

第4章のユンは、ユンの母を語ることで女性の生の逞しさを表現し始めた。韓国の父権制社会のなかで主体的に生きる女性を描き、新たな母像を作り出そうとした。韓国女性への深い洞察から、母の労働に無償の行為を見出し、肯定することで女性の復権を目指した。

第5章の出光は、男性原理の強い父の影響下、自己否定から自己肯定を図り制作を始め、高度経済成長期の日本の母子関係を批判的見地で表現した。出光は子どもを抑圧する歪んだ母像を写し取り、母性の負の側面を表現した。

これらの新しい表現の背景の一つにフェミニズムの興隆があった。この4人の女性アーティストを調べると、1960年代後半から始まり、70年代にピークを迎えたフェミニズムの運動が大きく関与していることが分かる。男性中心の見方である、愛情あふれる「良き母」の姿ではなく、父権制のイデオロギーに強要された母性に対して異を唱え、経験に基づいた、母性の負の部分が表現されている。

もう一つの大きな流れに、フロイトから始まる心理学の発達と精神分析の広まりがある。心理学の発達により、母性の解明が進み、負の面も提示された。それに理論付けされた「良き母」のイメージではない母の表現が生まれた。ケリーや出光は心理学に基づいた制作をしている。ケリーのPPDはラカンのL図を使用し、出光の母-子の物語は、ユング心理学の「グレート・マザー」に基づいて制作された。ブルジョワは幼少期の経験から深層心理を語り、子を支配する母を表現した。

本論では、4人の女性アーティストたちが、それぞれが属す社会の中で、男性中心のイデオロギーに違和感を感じ、自らの考える母像を表そうとしたことが分かった。男性中心社会に求められてきた

「慈愛に満ちた母像」でない、自らの経験に基づく、多種多様な母の表現が現れてきたのが分かる。

これらの作品は社会との強い関わりの中で制作され、女性アーティストたちの母の表象には様々な形態や意味があり、その文脈や論点を理解することで一層母性への理解が進むであろう。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、現代女性アーティストによる母の表象を論じたものである。美術史において、母は、聖母子像など自分の子どもを慈しむ姿で描かれてきたが、20世紀後半になると、それと異なる表現が登場した。本論文は、母の表象の歴史を概観した上で、母を表現している現代女性アーティストのうち、ルイーズ・ブルジョワ、メアリー・ケリー、ユン・ソクナム、出光真子の4名を取り上げて、現代アートにおいて母がどのように表現されているのかを考察している。第1章では、旧石器時代から、古代、中世、ルネサンスを経て、20世紀半ばに至るまでの母の表象の歴史を概観している。第2章では、ブルジョワを取り上げ、子育ての中で感じた悩みや恐れから作品をつくり、代表作である蜘蛛の作品に結実したことを論じている。第3章では、ケリーが、《Post-Partum Document》等の作品において、フェミニズムに基づきながら、父権社会において形作られてきた母性や女性性を問い直していると論じている。第4章では、ユンを取り上げ、自分の母へのオマージュから、無償の行為を行う母一般の表現へと変化したことを明らかにしている。第5章では、フェミニズムを学んだ出光が、家父長的な父の影響から独立して自己を確立する過程を描いている。本論文は、これまでまとまった形で考察されることのなかった現代女性アーティストにおける母の表象の問題を包括的に考察している。先行研究を丹念に読み込み、作家へのインタビューを行うなど、意欲的に調査を行っている。上記の点で優れた論文であるため、本審査で合格とした。